

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表
します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満
たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧
告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 北海道登別朝日中等教育学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中高一貫教育
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

住所 〒059 - 0016
北海道登別市片倉町5丁目18-2

E-mail : akebi@hokkaido-c.ed.jp

Website : http://www.akebi@hokkaido-c.ed.jp

児童生徒数：男子 190 名 女子 264 名 合計 454 名
 児童・生徒の年齢 12 歳～18 歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか (地域調査)

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

1 ユネスコスクールとしての教育活動と関連する本校の教育活動

(1) 教科学習／道徳

- ・ 環境問題を取り上げた学習
- ・ 地域の自然や文化を取り上げた学習
- ・ 異文化理解を取り上げた学習
- ・ グローバル社会へ対応を取り上げた学習

(2) 「総合的な学習の時間」

- ・ 1年次 地域ウォッチング（「北海道」の学習）
- ・ 2年次 地域の職場見学を通じて地域社会の国際化について学習
「留学生に日本を伝える」
- ・ 3年次 イマージョンプログラム（数学／社会／技術・家庭／ALTによる英会話の教科連携で学ぶ国際理解教育）、異文化理解をテーマにした講話「中国での日本語教師の経験から学んだこと」
- ・ 4年次 食をテーマにした課題研究（SGH スーパーグローバルハイスクール関連）
小学校の英語活動を通じた異年齢交流
- ・ 5年次 食をテーマにした課題研究（SGH スーパーグローバルハイスクール関連）
- ・ 6年次 小論文学習

(3) 特別活動／学校行事

- ・ 2年次 イングリッシュキャンプでALTに日本文化を紹介
- ・ 3年次 見学旅行（英語研修施設）にて異文化理解に関わる体験学習
- ・ 4年次 宿泊学習を通じて、道内企業の国際的企業活動の展開を学習
- ・ 5年次 海外（アメリカ、カナダ）見学旅行、ホームステイ・ボッセル高校生との学校間交流

(4) 生徒会活動／部活動

- ・ 文化祭におけるユネスコ展示
- ・ 世界食糧デー登別大会への生徒会執行委員の参加と合唱部の出演
- ・ 室蘭ユネスコ協会主催 ユネスコスクールフォーラムへの参加
- ・ ユネスコ寺子屋運動への参加、東日本大震災ユネスコスクール ESD 支援募金への協力
- ・ 地域貢献活動（クリーン作戦）

1 本校の国際理解教育とESDについて

本校の国際理解教育は、外国語教育を重視しながら、異文化理解に関わる体験学習をもとに実施している。中等教育学校の利点を生かしながら教科・総合的な学習の時間・特別活動の6年間の時間を系統的にとらえ計画

している。

例えば、行事においては、2年次（中学2年）のイングリッシュキャンプ、3年次（中学3年）の英語研修施設での語学体験学習を主体とした見学旅行、5年次（高校2年）の海外見学旅行である。これらの行事を中核としながら、総合的な学習の時間や教科の学習を有為に結びつけて国際理解教育を実践している。

ただし、国際理解教育の主たる目的は語学を身につけることではないため、これらの機会を生かして、学校の教育活動全体をとおして異文化理解や自国の文化や社会の特徴への理解を深めることが重要となる。

「本来、国際理解教育は、国際化・グローバル化した現代世界、社会の中で生きていくために必要な資質や能力を育成する教育である。」（『グローバル時代の国際理解教育』日本国際理解教育学会編 明石書店 28頁 1 国際理解教育の目標 より／ESDアシストプロジェクト助成金活用）したがって、学習した外国語をツールとして活用し、地球規模の問題の解決等をテーマに実践的にコミュニケーションを図る場面などがあるということが重要となる。自国の文化への理解を深めつつ、他者に対する寛容な態度や異なる文化を理解する姿勢を身につけ、価値観の異なる課題に対して協同して取り組むことのできる人間性や社会性を身につけることを、本校の国際理解教育においても目指していきたい。ユネスコスクールとして、ESDにかかわる教育活動を展開することで、本校の国際理解教育の理念と実践の具体像が明確にされる。

2 「地域ウォッチング」（「地域の『よさ』を発見する体験学習」）～1回生「総合的な学習の時間」の実践

（1）目的およびこれまでの学習活動

この学習の目的は、「身近な地域の産業や歴史、自然、文化について調査研究を行い、互いの意見を交流する学習活動を通じて、地域社会への理解を深めるとともに、身近な地域や北海道への郷土愛を育む」、「事業所訪問と聞き取り調査の際の注意点、調査研究の方法、まとめ方を学ぶ」としている。

本校では3年前より、北海道遺産の一つとされる登別温泉を題材に地域ウォッチングを実施している。

社団法人登別観光協会、温泉街の事業所に協力をいただき、①地獄谷周辺の散策路訪問、②ホテルの浴場清掃などの職場体験を含んだ内容、③事前に作成した質問に基づくインタビュー活動、の3つを柱としている。

取材時のテーマとしては次の8つとした。

- ① 登別温泉の歴史
- ② 観光客を迎える準備
- ③ たくさんの観光客を呼ぶための活動
- ④ 外国からの観光客や研修生への対応
- ⑤ 登別温泉のイベント
- ⑥ 登別温泉のお土産
- ⑦ 景勝地など登別温泉の観光資源

⑧ 他の温泉街やホテルとの差別化

(2) 学習活動の様子

事前準備については、当日質問する内容の検討や事前のあいさつを中心に取り組んだ。当日は、地獄谷散策では、地元の方々に運営している観光ボランティアガイドと交流しながら、大湯沼や天然足湯の見学・体験を行うことができた。また、それぞれの事業所では、浴場清掃や宴会場準備体験などを通して地域の方との交流ができ、事前に作成した質問に対しても説明をしていただいた。このような、地域の方々との交流や具体的な体験を含んだ学習活動を展開することができた。また、外国人観光客とも出会い、あいさつ程度ではあるが、コミュニケーションを図ることができたことも、生徒にとって貴重な体験の1つとなった。



天然足湯の体験

(3) 体験をまとめる作品作り及び礼状作成

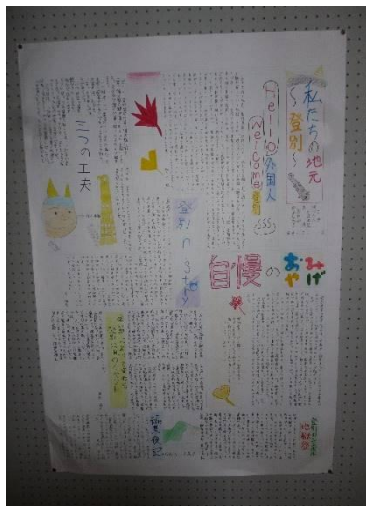
登別温泉で実施する地域ウォッチングのまとめについては、壁新聞として模造紙を使いグループ毎に作成した。撮影した写真をもとに、体験したことやインタビューしたことを作品の中でどう表現するかなどについて、グループで話し合い、それぞれの考えを交流させ、よりよい作品とするために創意工夫するといった学習活動を展開することができた。ESDアシストプロジェクト助成金により購入したカメラのおかげで各グループに1台カメラが行きわたっていたので、体験を振り返る活動がスムーズに行われた。



浴場清掃体験の様子

グループが作成した作品についても、ESDアシストプロジェクト助成金を活用し購入した有孔ボードを用い、校舎内の廊下に掲示し、生徒による相互評価を行った。また、お世話になったボランティアガイドの方や宿泊施設の方にお礼状を書かせることにより、体験を振り返り、感じたことを表現させた。お礼状などの手紙の形式等学習するよい機会となった。

(4) 作品（壁新聞）の一例



(5) 生徒の反応（授業後の感想等）

① 地域ウォッチングの感想

- ・登別温泉には何度か来たことがあったが、ガイドさんの説明を聞き、自分の知らないこともたくさんあるのだと気づいた。
- ・温泉街で働いている人々の仕事内容や、日々思っていることを聞いたり、体験できたりして観光という職業のやりがいと苦労している点などがよく分かった。

② 登別という「まち」に、どんな誇りを持ったか。

- ・天然温泉だけではなくたくさんの自然があること。たくさんの方が毎日登別を良くしたいと努力していることに誇りを持った。登別温泉が有名になった理由もよくわかる機会になりとても良かった。
- ・外国の方がたくさん観光に来てると知り、自慢に思った。これからも外国の方がたくさん来るように自然を愛し、町を大切にしようと思った。

③ 作品作りにおけるグループ活動の状況について

- ・壁新聞のレイアウトを考えるのが予想以上に難しかった。文字の大きさや色を変えることで見た目もずいぶん変わるということが分かった。
- ・壁新聞を作る際、文章が上手な人は内容を考え、文字を書くのが上手な人は文字を書き、レイアウトを考える人は一生懸命レイアウトを考えるなど得意分野で分担したのが良かった。
- ・1人1人の意見を聞き、みんなの力を合わせて1つの作品を作り上げるということは、とても大変な事でしたが、班のみんなと力を合わせるにより完成することができるのだと実感した。
- ・全員で協力し合い、互いの得意な作業を分担し、とても上手くいった。話し合いも活発に行われ、全員が一生懸命取り組んだので、よい作品ができたと思った。

(6) 今後の課題

今のところ、登別温泉に関わる学習活動は、1年次で行う地域ウォッチングのみであるが、今後は、より学習活動の効果を発展させるために、英会話や中国語の授業などとリンクさせ、本校で実践されているその他の国際理解教育や学校設定科目の「国際観光学」と関連性を持たせていくことが課題である。また、本校は今年度、文部科学省のSGH（スーパーグローバルスクール）の指定を受けた。SGHといかに関連を持たせていくかということも検討していきたい。

2 「異文化理解の授業」（「世界の少数民族について ～地域の留学生を招き、交流をとおして考える ～5回生「世界史」・「中国語」での実践）

(1) 取組の概要

ユネスコスクールESDアシストプロジェクト助成金を活用した異文化理解に関わる5回生「世界史」および「中国語」における実践である。2010年度ユネスコスクールESDアシストプロジェクト助成金により購入した、「多文化教育の研究 ひと、ことば、つながり」（早稲田教

育叢書)、「世界の友だちとくらし 中国の友だち」(学校図書)を指導参考資料として活用した。

(2) 本実践事例について

① 本事例実施の背景

実践の該当学年である5回生(高校2年生)は、本年度の12月にアメリカ・カナダへの海外見学旅行を経験し、外国人との交流を全員が行っている。また、中国語の選択者においては、今年度の4月より中国語を学んでおり、簡単な日常会話を中国語でできるようになっている。生徒の視野を更に広げ、体験をとおして異文化交流についての生徒の認識を深めることを目的に実施した。今回は、内モンゴル出身の中国語も堪能なアジアの少数民族であるモンゴル族の留学生を2名、招いた。本校周辺は交通の便があまりよくないので、留学生を招く際にESDアシストプロジェクト助成金を交通費として活用し、留学生の方にタクシーを利用して来ていただいた。

② 指導のポイント

生徒の関心を高め、外国人との交流を身近なものとしてとらえられるようにするため、留学生の出身国や民族の歴史等について、パワーポイントを用いて紹介してもらう。その際に民族衣装の紹介や民族楽器(馬頭琴)を演奏してもらうことなどをおして、少数民族の文化について考える一助とする。

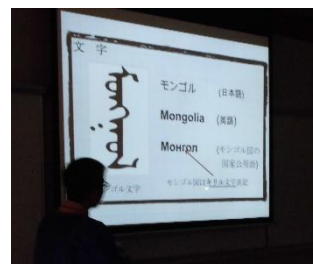
③ 指導のねらい

異なる言語や文化の生活・習慣・価値観などについて、互いの違いを認めつつ、相手の立場や考えを理解し、尊重する態度を育成する。中国語の授業においては、モンゴル語・中国語と日本語を比較しながら、発想や着眼点の違いを考え、互いの言語、文化を尊重する態度を育成する。

- ④ 対象学年・科目 5回生(高校2年生) 世界史72名、
 5回生(高校2年生) 中国語18名

(4) 生徒の反応(授業後の感想等)

- ・留学生のモンゴル語や中国語がとても美しく聞こえた。それ以上に留学生の日本語の上手さに驚いた。私も外国語をしっかりと学ぼうと思った。
- ・モンゴル語は縦書きで携帯のラインなどの文字も縦書きに出るということに衝撃に近いものを感じた。
- ・中国の内モンゴルとモンゴルの違いについて、分からないことが多かったが、今回の説明でよく分かった。
- ・美しい民族衣装を間近に見ることができ大変よかった。また、馬頭琴については、名前を聞いたことがあったが、実際に音を聞いたことがなかったので新鮮だった。同じアジアの国でも違う環境にあれば、異なるたくさんの文化があることが分かり、自分の視野を広げる良い機会だった。
- ・本校の生徒として生活していく中で、私は欧米を重視していましたが



今回の授業を受けて、アジアにも目を向けてみようと思いました。

- ・この授業を受けてとても良い刺激を受けました。内モンゴルという国をとおして世界を見つめ、のぞいてみるということができました。
- ・このような授業を受け、あまり興味のなかったアジアに少し興味を持つことができたかなと思いました。



- ・これからの国際社会は英語だけでは通用しないので、たくさんの言葉やその文化にふれてより多くの人につながっていきたいです。

- ・日本語とモンゴル語、中国語とを比較することで日本人の発想とモンゴル人、中国人の発想が異なるということも学べたので、様々な言語を学ぶということは大切なこと

だと改めて感じました。

- ・内モンゴル、中国について少し知ることができ、何も知らない私が中国などについて語ることは中国に対して失礼なことだと思った。
- ・内モンゴルではミルクティーに塩を入れると聞き、食文化の多様性を改めて感じた。
- ・中国語の授業の際に、私の中国語が留学生に通じてとても嬉しかった。特に自分の名前を中国語で発音した時、聞き取ってもらえてすごく嬉しかった。もっとネイティブの方とふれあって自分のスキルアップにつなげたい。そのためにも授業でしっかりと中国語を学びたい。
- ・このような授業を受けなければ、内モンゴルや少数民族のことを深く考える機会はなかったと思うのでこのような機会があってよかった。
- ・日本と外国の関係は政治的にはうまくいっていないケースもある。しかし、北海道、特に登別にはたくさんの外国人、特にアジアの方が観光に来ている。互いの文化を知るためにも、学生時代にこのような異文化交流をすることはとてもいいことだと思った。
- ・姉妹校のアメリカ人から、遠い国のことを理解するのも大切だが、アジアなど近くの国を理解することも大切だと言われたことがあったのを思い出した。日本のこともしっかりと勉強した上でアジアやアメリカのことをしっかりと勉強したいと思った。
- ・内モンゴルの方も日本のアニメが大好きで、アニメで日本語を覚えたと言き、日本のアニメのすごさを知った。
- ・馬頭琴を実際に見て、先端には本当に馬の顔があって驚いた。音色はヴァイオリンの音色と似ていたが弾き方は三味線に近い気がした。
- ・大学院で研究をしている留学生の方が来てくれて、忙しい中、私たちのために来てくれたことに感謝したい。私も日本人であるということでは何かの役に立つことができればいいし、何か外国の方に役に立つことをしてみたいと思った。

3 「異文化理解の授業」(「世界一大きな授業」をとおして言語教育の大切さを考える ～5回生「中国語」での実践)

(1) 取組の概要

日本ユネスコ国内委員会、ユネスコ・アジア文化センターが後援している「世界一大きな授業 2014」に参加することをとおして、世界の教育の現状を知り、教育の大切さ、特に言語教育の意義を学ぶ。



(2) 本実践事例について

① 本事例実施の背景、ねらい

本校は英語教育に重点を置きながら国際理解教育を推進しているが、5回生（高校2年生）になると、第2外国語として中国語も選択できる。このような外国語教育に関して恵まれた環境にいることを世界の教育の現状を知ることとおして、再認識させ、言語・文化を尊重する態度を育成する。

② 対象学年・科目 5回生（高校2年生） 中国語 18名

(3) 生徒の反応（授業後の感想等）

- ・世界には文字の読み書きができない人が、私の想像をはるかに超えるほどいるということが分かった。
- ・日本の教育環境に良さを改めて認識した。勉強できることを有り難いと思わなければならないと思った。
- ・今回の内容を世界各地で勉強している人がいると思うと、世界の教育の問題などを解決する方法が見つかるのではないかと思った。
- ・世界の国々に経済的支援をするのも良いが、学校を建設するなど教育活動を支援できるような取組にもっと力を入れるべきだと思った。



3 「生徒によるユネスコスクールの活動」～文化祭における「ユネスコ展示」

(1) 取組の概要

本校はユネスコスクールに登録されていることから、生徒会活動においても、積極的に国際理解活動に取り組んでいる。その一環として、毎年7月に開催されている文化祭において「ユネスコ展示」という国際理解をテーマとしたパネル展示を行っている。今年度は発展途上国について、教育、医療、水問題、伝染病、生活の5つの視点から展示を行った。その際にESDアシストプロジェクト助成金を活用し購入した有孔ボードを用いた。

(2) 取組の実際

教育、医療、水問題、伝染病、生活の5つのテーマについて生徒が調べ、展示したことは以下のとおりである。

<教育>

- ・貧困と学習環境のつながりについて
- ・貧困の連鎖について
- ・どれほどの国が学習できない環境にあるのか

- ・戦争の学習環境の変化
- ・学習ができない国の特徴
- ・日本やユネスコが作った学校の数や校舎風景、学習内容
- ・学校の数や設備

<医療>

- ・5歳以下の死亡率
- ・死亡の原因
- ・地雷とは
- ・地雷の種類

<水問題>

- ・日本が協力した途上国の井戸
- ・途上国の水の汚染について
- ・暮らしのなかの水

<伝染病>

- ・流行している伝染病
- ・伝染病による死亡者・死亡率
- ・伝染病に対する国際機関の活動
- ・伝染病の感染媒体について

<生活>

- ・他国の伝統的な衣装の展示
- ・先進国と途上国の1日の生活の違い

(2) 活動時間について (下記から選択して下さい。)

- 通常の授業時間を使用 (総合的な学習の時間を含む)
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他 ()